「笹川杯作文コンクール 2010」～中国語で応募～ 第 6 回優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

「ごみ分別に見る官民の交流」

河南省　黄俊豪

現在の中国において、生活ごみの処理は、集めてごみ箱に放り込んで、ごみ運搬車で中継所に運び込んで圧縮してから、郊外で焼却または埋却というものである。ごみの分別管理が不十分なため、多くのごみは埋却後の分解に百年もの時間を要する。生態環境の破壊が深刻である。また、焼却所から発生する“毒の中の毒”ダイオキシンは、人々の健康に極めて重大な害をもたらす。このため、社会経済の急速な発展に伴って、ごみ問題が次第に注目を集め始めた。2009 年 12 月の広東連州国際撮影家年展において、フリーカメラマンの王久良が出品した『ごみが都市を包囲』は、この年の傑出芸術家として金賞を獲得した。作品は、全体を通して、北京がごみに包囲されている問題への憂慮を表すものであった。それから半年余りして、北京市当局は、北京市のごみの処理能力不足は深刻であると発言したのである。私たちは本当にごみをどうすることもできないのだろうか？答えはノーである。

初めて日本を訪れた中国人観光客は、誰もが道々の清潔さに心を惹きつけられる。道の両脇にはたくさんの、用途が異なるごみ箱があって人目を引く。可燃物専用、不燃物専用、資源ごみ専用、粗大ごみ専用、有害ごみ専用など、中国国内では見られないものばかりだ。しかも、一部の地域社会では、外来者が少ないため、ごみ回収車が毎週決まった時間に各家庭の分別済みのごみを集めて回ることになっており、ごみ箱がないという。日本のごみ処理方式は、“分別回収、合理的利用”であり、科学的な管理のもとで分別の効率化が徹底されているのだ。

しかし、日本であっても、初めからそうだった訳ではない。1940 年代から 90 年代初頭にかけ、日本でも盲目的に経済発展を追求するあまり、環境問題を無視して深刻な代償を払ったのである。よく知られている“水俣病”、“イタイイタイ病”、“カネミ油症”の外、豊島の不法投棄事件も、日本に莫大な損失をもたらした。豊島の問題については、当該自治体が無害化処理だけに少なくとも 50 億円と 10 年の時間を費やしたのだが、この過程に生じた二次汚染による損失は計り知れない。

汚染のため莫大な代償を払った後、その痛みを教訓として、日本政府は“汚染が起きてから処理”という発想を放棄し、根源からのごみ管理を選択したのである。優れた科学技術を糧に、熱分解気化の技術を利用し、ごみを摂氏 800 度から 1100 度の高熱のもとで分解し、残った汚染物質は厳格に密封してから海の埋め立てのための材料に転用するのである。一見投資が大きいような処理方式だが、これにより日本は汚染大国から“ごみゼロ”国家への転換に成功したのである。

この過程において、国民の環境保護意識と官民協力が決定的な役割を果たしている。ごみの効果的な分別を確実に実施するため、国から地方自治体までがごみの処理を重要課題として取り扱った。テレビを通じた解説、地域社会への宣伝、ポスター、情報ハンドブックなどに至るまで、各人にごみ分別を理解させることが、彼らにとって最も重要な任務である。ごみの処理規程に違反した市民には、自治体から指導のための担当者が派遣された。このほか、日本のテレビには、専門のコーナーの中でごみの分類処理を受け入れたがらない市民に司会者が接触し、市民が自発的に分別できるようになるまで、弛まぬ努力を続けて一緒にごみを処理するという番組もあった。

今年の上海万博では、ごみの捨て方について非常に考えさせられるところがあった。一部のパビリオンでは、清掃用員が足りないため、その日の展示が終わる頃にはいつも出入り口に沢山のごみが勝手に捨てられていた。しかし、5 年前に日本で行われた愛知万博では、“一つのごみも会場から出さない”がスローガンになってお

り、各ごみ箱には二名の専門用員がついていた。こうしたことは、政府が環境を重視しているだけでなく、その地域の人々の環境意識にも直接関係がある。

ここから得られるヒントは、ごみ問題に向き合う際、官民の交流と協力によって良好な相互補完ができなければ、ごみの分別は実現し難いということである。不完全なごみ処理体系、ごみ箱の度重なる設置、ごみ分別に関する住民の教育不足といった多くの問題は、自治体と市民との間に良好なコミュニケーションが成り立っていないことを物語っているのである。

ごみ処理技術については、2001 年 7 月、『中国青年報』に『第三世代ごみ処理技術は前途多難』なる文章が掲載されている。英国籍の中国人・彭重民氏が国際的に最新の環境保護技術を中国へ導入しようと尽力したが、様々な問題によりその普及が阻まれているという事情について述べられたものだ。

これは再考に値する。私たちの発展と進歩を制限するもの、それは何なのだろうか？私たちが環境保護問題への関心を持ち始めていることは歴然としている。2009 年のコペンハーゲン国連気候変動会議において、中国は自身の低炭素理念を述べたが、自然環境問題は悪化を続け、ごみの量も増加し続けている。中国の ENGO(非政府環境保護組織)は数少なく非力であり、住民の環境保護意識も欠乏しているという問題が、いまだに中国の環境保護事業が抱える難題なのである。そのため、ごみ処理問題において、中国はごみ処理に関する理念や経験を日本からもっと学ぶ必要がある。つまり、中国政府はもっと積極的に日本などの先進国と技術交流をする必要があるのだ。そして、民間の環境保護交流、特に日本の多くの ENGO のごみ管理に関する経験やそれを発展させた経験を吸収すれば、中国国民の環境保護意識を向上させることに役立てることができ、中国におけるごみの分別回収事業を発展させる上でプラス効果を発揮する。

手を携えて協力し、共に進歩する。ごみ処理を如何に行うべきかに関して日本に学ぶことは、中国政府と住民との交流、中日政府間での技術協力、中日民間交流といった問題について大きな意義がある。